近所の農家さん

原島（はらしま） 克佳（かつよし）さん（52）
（日の出地区）

原島さんは、27歳の時に勤めていた会社を退職し、実家の農業を継いだ。

父親は長年酪農を営んでおり、牛の世話で休み無く働いていた。自身が就農したことで、両親を旅行に行かせてあげられたことが、良かったと話す。

野菜の栽培技術や農業に対する考え方の多くは、父親と日の出町の先輩農家の馬場（ばば） 英夫（ひでお）さん、敏（とし）明（あき）さん親子から教わった。視察研修に参加するほか、専門農家に直接話を聞きに行くなど技術の向上に努めた。「苦労した人の話は何よりも学ぶことが多い。農業は毎日畑を見て考えることが肝心」と話す。

現在は冬から春にかけてカブ、ニンジン、夏はエダマメを中心に栽培する。特にエダマメには力を入れており、5年前に脱莢機（だっきょうき）を導入してからは、作付面積を増やし、現在は85アールの畑で栽培する。一番おいしいエダマメの収穫適期は3日間、順番に収穫出来るよう、4月から7月中旬にかけて種まき、育苗、定植を約80回行う。

こだわっている訳ではないと話すが、商品の選別には力を入れており、お客様に納得して買ってもらえるように、手間を惜しまずより良い品質を目指している。就農当初からずっと心がけていることは、「良いものを、安定的に、適正価格で供給する」ことだ。

手間を惜しまない分、作業は増えて時間も掛かる。体への負担も多くなるため、常に効率や省力化を考え、必要な道具は工夫し自分で作る。収穫したカブの洗浄、水切り、束ね、袋詰め、バーコード貼りなど一連の作業が流れるようにできるよう、作業台の位置や道具を置く場所も計算している。就農前に勤めていた服飾メーカーでの生産管理の工程や、工場での効率を上げるための工夫などが、農業をやる上でも役に立っていると話す。

手先が器用で良かったと笑う原島さんの作業場は手作りの道具と創意工夫で溢れている。

手作りの洗浄機でカブを洗う原島さん

今後の目標は、「エダマメの作付け1ヘクタールを達成すること。そのために、更なる道具の改良も計画している。ただ、気象の極端化が進んでおり、年々栽培が難しくなってきている。こればかりは受け入れるしかないが、品種や管理方法などいろいろ試しながら目標を達成したい」と意気込みを語った。

直売所に並ぶ原島さんのエダマメ

枝付きのエダマメ